

〈特集号〉の編集を終えて

土屋健治教授が逝かれてから、早いもので、二度目の盆が来ようとしている。

一昨年夏、外国出張先で体調の変調を訴えた土屋さんは、出張を手短に切り上げて帰国された。しばらく病院での検査を繰り返していたが、その間、病気というものが持つ不条理、なぜ自分が難病に冒されなければならないのか、それを自分自身に納得させられないのが辛いと何度か口にされていた。1993年3月の最初の手術以来、土屋さんはこの不条理とつねに対峙していたのだろう。この特集号の土屋健治教授著作目録を見ればわかるように、非常に多作な土屋さんの研究歴の中にあっても、晩年の3年間の執筆量は圧巻である。まるで修羅のごとく、病気の不条理を自らのペン先で振り払おうとしていたかのようである。

1995年に入って、病状の一進一退をご家族とともに見守っていたわたしたちに、2月27日、土屋さんの訃報がもたらされた。4月4日、このニュースのショックと悲しみに深く包まれた中で、故土屋健治教授追悼式が京大会館で行われた。そして、4月1日に発足した『東南アジア研究』新編集委員会の最初の決定事項は、『東南アジア研究』の1冊を土屋さんを偲ぶ特集号として発行しようということだった。

特集号の構成については、土屋さんの生涯の中心的な研究関心をテーマに据え、土屋さんにゆかりの深い人々に原稿執筆依頼をすることになった。テーマは「インドネシア国民の形成」。そして、西村重夫助教授に、特別編集委員として特集号の編集に参加してもらうことになった。依頼から原稿提出締切までの期間が短いことから、依頼を受けても辞退をせざるをえない人が多かろうことが予想された。こうした可能性への配慮もあり、最終的には20人以上の国内外の人に原稿依頼を送付している。

特集号の企画から原稿依頼までの慌ただしさの中で、今思えば当然原稿を依頼すべきであったにもかかわらず抜け落ちてしまった方、また、土屋さんの追悼特集号であるなら当然原稿執筆を希望されるであろうが、設定テーマの関係から執筆依頼リストから外さざるをえなかった方が多数存在する。こうした方々には、ひたすら御寛恕と御理解をお願い申し上げる以外はない。寄稿を受けた原稿は全編採録することを前提にし、最終的にはセンター外11人の方から御寄稿を得、センター内4人からの寄稿と合わせて全編15論文という大部の特集号を編むことができた。

生前の土屋さんは多才・多能な人だった。「天は二物を与えず」というが、土屋さんは三物も四物も与えられていた。研究者として秀でていただけではない。教育者としても優れており、また行政面で卓越した能力を発揮するとともに、研究会や研究プロジェクトの企画能力・組織能力も抜群だった。天はまことに不公平である。しかし、この不公平もむべなるかなと納得せざるをえなかったのは、土屋健治という人間がなによりも誠実で優しい人だったからである。

生前、土屋さんが師とし畏友ともしたコーネル大学教授ベネディクト・アンダーソンは、『時間の束をひもといて 追悼土屋健治』(1996)の中で、土屋さんのことを「真の意味での(気高い)王子」(a real prince)、「かけがえのない」(irreplaceable)人と表している。

わたしたちそれぞれにとって、それぞれの意味で「かけがえのない」存在だった土屋さん、この特集号をあなたの御霊前に捧げますとともに、あなたの御冥福を心よりお祈りします。

合 掌
(特集号編集委員)